

「一人前の教師」になるために

埼玉県立朝霞高校 川添 英雄

ある研究会のアンケート調査に「一人前の教師」とはいう質問がありました。「一人前の教師」の条件として多かったのは、「子どもに信頼される」と「分かる授業ができる」の二つでした。これは大方の人が一致できることではないかと思えます。問題は、「一人前の教師」なるのに、何年くらいかかるかという質問で、半数は「年数では測れない」と回答していますが、「5年」が17%、「10年」が26%という答えでした。

「一人前の教師」が「子どもに信頼されたり」「分かる授業ができる」教師であるとするならば、「分かる授業」をするのに、また「子どもに信頼される」のに、5年や10年もかかるのは、ちょっと変ではないでしょうか。高校では、1年の初任者研修を経て、多くの学校では2年目にHR担任を任されることになるでしょうし、小学校では1年目から担任を任さ

れるケースもあると聞きます。「一人前」でない教師に、授業やHRを任せることになるのかという疑問を持ちます。

もちろん、回答された方々は、かなり自分のことを謙虚に答えられたのではないかと思います。少なくとも生徒や保護者の前では、すべての教師が自分は「一人前の教師」なのだという自覚をもたなければならぬのではないかと思えます。

しかし、本来の意味で、自分が「一人前の教師」であると自覚するには、やはりそれなりの時間がかかるのかも知れません。教科についての知識と指導力を身につけたり、生徒や保護者との関係をつくっていくには、かなりの経験が必要かも知れません。さらに、HR運営や分掌の仕事、委員会や部活動の指導など、教師の仕事は多岐にわたります。

そういう仕事を学ぶのに必要なのはや

はり職場の同僚の力ではないでしょうか。若い人たちが失敗しても、それをフォローできる職場でないと、教員がまともには育っていけないのではないかと思えます。若手もベテラン教師も共に苦勞を語り合い、お互いに切磋琢磨をしていける職場づくりが大切ではないかと思えます。

私が授業やHR運営などで、困ったとき、最も頼りにしたのが、組合や民間の教育団体でした。職場だけでは得られない教育実践を学ぶ貴重な機会でした。そこで得られた知識や経験の蓄積は私にとっては「宝物」のように大切なものでした。

若い高校教師たちが、「教師になるきっかけ」として多いのは「高校時代にいる教師にめぐり会えた」ということです。今、学校で学んでいる生徒たちの多くが、教員という仕事に魅力を感じ、将来教員につきたいという願いを持ち続けるためには、私たちが生き生きと、やりがいをもって、教師という仕事を全うしていくことではないでしょうか。そしてそれが可能な職場の環境づくりをめざしていくべきものと考えます。